ティオの冒険記

マスケット銃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ティオの冒険記

【Ｎコード】
Ｎ３５４１Ｚ

【作者名】
マスケット銃

【あらすじ】
一人の少年が冒険に出た。
名前はティオ・アルペノス。
魔族の血が半分流れる彼は冒険者だった父に憧れて、十五歳を迎えた日に旅に出る。
しかし期待と不安を胸に抱いて飛び出したのだが、いきなりとんでもない化け物と戦う羽目に！？
その後も少年の予想を右斜め上に超える出来事が次々と起こっていく。

それでも少年はくじけずに前へと進み続けて成長していく。
剣と魔法とモンスターの世界で新米冒険家が成長していく冒険物語。
と、思いきや、だんだんとんでもない展開に巻き込まれて……！？

第一話　旅立ち（前書き）

こんばんわ、初めまして、マスケット銃と申します。
前作はすぐにやめてしまい、申し訳ありませんでした。
今回はそうならないよう努力します。

第一話　旅立ち

カミール村
この日、一人の少年が旅に出ようとしていた。
名前はティオ・アルペノス。
この地方では珍しい黒の髪が目を引く。
背は低めだけれど冒険家だった父に仕込まれた剣の訓練と森で獣狩りをしているため、体には俊敏に動くための筋肉しかついていない。
背が低くて童顔なために彼のことを知らない人間は子ども扱いするだろう。
そして一番の特徴は尖った耳と金の瞳、魔族である母の血が強く出ていた。

祖父、父が冒険者であるティオは今日一五歳の誕生日を迎えて、前から決めていた冒険へ出ることになった。
背中に町に着くまでの数日分の食糧と飲み物や旅には必要不可欠なものが詰め込まれたリュックを背負い、使い慣れた片手で扱える幅広の剣を腰に帯びている。

見送るのは両親と村長、彼の遊び友達であるジャック、ポアラ、カーニの六人。
母親であるセフィラがティオを優しく抱きしめる。
「あんまり名前を上げようとして無茶はしないでね。危ないことには加わらないで頂戴ね？」
「僕は冒険者だよ、母さん。逃げてたらなにもできないよ」
そう言って母の背中を優しく叩く。
息子がそういうことをわかっているセフィラは苦笑して、父の悪いところが似てしまったティオの頬に触れる。
「こういうときは嘘でもいいから親を安心させるものよ」

そう言って息子の肩をぱんっと叩いた。

父、ガルドラは豪快に笑ってティオの肩にスコップのように大きな手を置く。

「ま、若いうちに痛い目にあったほうが成長できる。前を進む者に名誉は来るって言うしな」

そう言って腰に帯びた剣を強く叩いた。

この剣は祖父が友人の鍛冶師に創ってもらったもので、父もこの剣を手に冒険に出た。

その後、槍に持ち替えたために剣を使うことはなかったが、息子がこの剣を持って旅に出る姿を見ると自分の昔を思い出してしまう。

息子の姿に誇りを感じるけれど、寂しさも胸の内から湧いてくる。

笑って気持ちをごまかそうとするけれど、剣に触れる手は震えていた。

「……いいか、手紙は必ずだしてくれよ。何も書くことが浮かばなくてもいい。おまえが無事なのがわかればいいからな」

「もちろん書くよ。町に着いたら絶対に出す」

「それと早く仲間を見つけるんだぞ。一人でできることなんてほんの少ししかないんだ。わかったな」

「わかってるよ、父さん」

前から同じことを繰り返す父を安心させるようにティオは溜息をついてしまう。

自分の言葉を甘く受け止めている息子にもっと言い聞かせてやりたいが、あまりしつこく言うのも悪い気がするのでやめておくことにした。

「まぁ、そのうちわかってくるか……」

両親が一歩下がると、変わるように村長とジャックたちが彼を囲う。

村長は年老いてまがった腰をなんとか伸ばして自分より背の高いティオの頭に触れる。

「おまえの祖父も父もこの村を出て行って、この村に戻ってきた。おまえもちゃんとここに戻ってくるんだぞ」
「もちろん戻ってくるよ」
次にジャックたちが次々に声をかけていく。
「帰ったらいろんな話聞かせろよ！　土産は忘れるなよ」
「ぜったい帰ってきてね！　私待ってるからね！　私真珠のネックレスがいい！」
「……カラウラ産の牛が食いたい」
「うん、僕は冒険に出るんだからね。旅行に行くんじゃないんだからね」
仲間たちのちゃかしについ笑ってしまう。
本当はもっと喋っていたいけれど、このまま喋っていたら決心が鈍ってしまう。
意を決する様に腰に帯びた剣にそっと触れる。
「それじゃ、そろそろ行くよ」
そう言った瞬間、楽しそうに話していたジャックたちは黙ってしまった。
が、寂しさは隠しきれていないけど笑顔でティオを抱きしめる。
一人だけまだ幼いカーニだけが泣きそうになりながらティオの服を掴む。
ティオはしゃがんでカーニの頭を撫でる。
「絶対帰ってきてね……」
「うん、いい子で待っててね」
それから拳を当てて村に伝わる絶対の約束を交わした。
村長は両の手を合わして神に祈りをささげる。
「神よ、この子に厳しい試練と深い慈悲を与えたまえ」
そして一人一人と抱きしめあった後、セフィラとガルドラに向き直る。
「行ってきます！」
「ああ、行ってこい！」

「いってらっしゃい。風邪ひかないでね」

両親と仲間たちに見送られて、少年の冒険が始まった。

第一話　旅立ち（後書き）

はい、主人公が旅に出ました。
これからいろんなことに巻き込まれながら成長していきます。
他の小説とは違った展開になるよう考えています。
特にチート＆ハーレム、おまえらの出番ねぇから！
……ごめんね、使いこなす自信がないんだ。
と、言うことでアドバイス、指摘などがありましたらよろしくお願いします。

いきなりバトル！（前書き）

はい、いきなり戦闘に入ります。
拙い文章ですが、人が死にますのでご注意ください。

いきなりバトル！

近い町までは徒歩だと1日はかかる。
しかし視界の広い草原を歩いていくだけなので急がずに歩いていく。
幸い、草原にモンスターは出ることはないし、天気も丸々太った雲が流れている快晴だ。
だから道端に生えている薬草を摘みながらのんびり歩こうと考えていた。

薬草は何種類もあって組み合わせ方で傷に利く薬になったり、腹痛に利く薬になる。
夢中になって摘んでいると背後から声をかけられた。
「おい、あんた。こんなところでなにやってんだい？」
振り返れると、幌馬車にのった商人がティオを見下ろしていた。
「ああ、町に行こうと思ってたんですが、薬草がたくさんあったんで摘んでいたんです」
「へぇ、そうなのか。町に言うんなら乗せて行ってやろうか？」
「いいんですか？」
思わぬ申し出にティオはパァっと顔を輝かす。
格好を見て冒険者、それも旅の常識もまだ知らない新米だと読んだ商人はティオの子供らしい反応に、つい笑ってしまった。
「構わんよ。さっきも二人拾ったんだ。一人ぐらいどうってことないさ」
「ありがとうございます」
軽く頭を下げたティオは商人に駄賃を払って後ろの荷台に乗る。
木箱が場所をほとんど占めているが、なんとか空いている場所を探して座る。

ティオと向かい合うように二人の男女が座っていた。

軽く挨拶をすれば眼鏡をかけた黒髪の女性がにっこり笑って挨拶を返してくれた。
「こんにちわ、君も冒険者かな？」
「はい、あー、えっと、今日村を出たばっかなんです」
「へー、そうなんだ。いーねー。若いねー。」
そう言って人懐っこい笑みを浮かべる。
「私たちも似たようなもんだからわからないことがあったら聞いてね」
歳は２０代後半だと思ったが、ふにゃっと笑うと幼く見えた。
「あ、そうだ、紹介をしてなかったね。私はセレハート。彼はトール。無口だけど私のパートナーよ」
「ティオです。よろしくお願いします」
セレハートは魔術師らしく、黒の皮鎧の上に紫色のマントを羽織っていて透明な結晶がはまった杖を持っている。
そしてトールはティオより2、3ほど歳が上の青年で褐色肌でとげとげした灰色の髪が無造作に伸びている。
胸当てと肘と膝を護るプロテクター、鉄鋼が仕込まれたグローブと動きやすさを重視した軽装備。
己の体を武器とする拳闘士のようだ。
二人の会話に加わろうともせず、紹介されたときも頷いただけだ。

馬車の振動に揺られながらティオはセレハートから冒険者としてのアドバイスを聞いていた。
冒険者は仕事を斡旋するギルドでクエスト、魔物討伐や物資調達をする際は最低でも二人1組み出なければいけないこと。
組んだ仲間の短所長所を把握し、戦闘での役割分担をつけておくこと。
また散策するときもメンバーの配置に気を配らなければいけないことなどなど、セレハートは父から教えてもらわなかったことを丁寧に説明してくれた。

「一番やっちゃいけないのは単独行動に出るのと道具をそろえておかないことね。
魔物は弱ってる者や逸れた者を狙うことが多いし、一人で魔物を相手にするのは自殺するようなものなの。
それに道具を揃えなかったためにベテランが毒に侵されて死ぬこともよくあることよ。
町の外で生き残るには最低でもこの二つは犯しちゃ駄目ね」
「わかりました」
なんとかセレハートのアドバイスを聞き逃すまいと、書き慣れない文字でメモを取る。
その様子を見ていたセレハートはつい笑ってしまった。
「いやー、なんか久しぶりに反応を返してくれる子がいると、ついたくさん喋っちゃうわねー。
この子、見ての通り無口だから寂しかったのよ」
そう言ってセレハートは隣に座るトールを肘で小突く。
「あんたも先輩としてなにかアドバイスしなさいよー」
「……敵」

「え？」
強めに小突かれても無反応だったトールが急に立ち上がる。
ティオも釣られて外を見てみれば、馬車に向かってくる影が複数見えた。
まだ遠すぎるために姿ははっきり見えないけれど、どんどん近づいてきている。
セレハートが帆をめくって手綱を操っている商人に呼びかける。
「商人さん、ちょっと問題が起きたみたいよ」
「問題？」
問題という発言に商人は不安そうにセレハートの顔を見る。
「うしろから人が来てるんだけどさ、たぶん盗賊だね」
「なんだって！？　ああ、くそ！」

商人は罵声を吐くと馬の尻を叩いて拍車をかけようとする。
しかし荷を満載した馬車が出せる速さも限度があり、追いかけてくる集団と距離がぐんぐん縮まる。
セレハートは帆からわずかに顔を覗かせて、追いかけてくる集団の数と武装を把握する。
「数は８人、弓は持たずに剣か斧を持ってるね。よし、ティオ君は二人ぐらい任せてもいい？」
ティオは鞘から剣を引き抜いて、深呼吸を一度してから頷いた。
「大丈夫です。やれます！」
「人は殺せる？」
セレハートがあっけらかんと聞いてきたために言葉に詰まってしまったが、気を取り直して頷いた。
「……人を殺したことはあります」
「なら大丈夫だね。トール、あなたもよろしくね」
声をかけられたトールは軽く頷くと、強張った体をほぐそうと狭い馬車の中で背伸びをする。
今から戦闘に入るのに緊張していないトールに、ティオは驚きを隠せなかった。
馬に乗った男たちは皮鎧を着こみ、手入れをしていない剣や斧で武装している。
盗賊たちはあっという間に馬車に追いついて囲みこんでしまった。
その一人が腰帯からナイフを抜いて馬車に投げつける。
「死にたくなけりゃ止まれ！　大人しくしてりゃ命はとらねぇ！」
商人は恐怖で顔を強張らせて、盗賊の言うとおりに馬車のスピードを落とした。
馬から降りた
盗賊たちは４人が馬車を囲んで残りが後ろに回り込んで積み込まれた荷を覗き込もうとした。
一人が近づいて帆をめくろうと手を伸ばす。
が、盗賊がめくる前にティオとトールが飛び出して襲い掛かる。

飛び出したティオは目の前にいた盗賊を地面に押し倒した。
そのまま相手に反応を取る間も与えずに倒そうとしたが、剣を持つ腕を掴まれて阻まれてしまう。
剣を胸に突き刺そうと力を入れるけれど、盗賊も刺されてたまるかと必死に抵抗する。
なので剣で刺すことを諦めて、盗賊の顔を殴りつける。
盗賊は片腕で顔を庇おうとしたが、容赦なく3回殴って気絶させた。
「このやろう！」
仲間が斧を振り上げてティオに襲い掛かる。
振り下ろされる前に横に転がって避けるが、次に繰り出された蹴りを顔に受けてしまった。
「立て、クソ野郎。鱠切りにして喰ってや……！」
喚きながらティオに近づこうとした盗賊が白目を向いて前のめりに倒れる。
男の急所を蹴りつぶしたトールは泡を吹いて倒れようとした盗賊の首に腕をからめて捻る。
首が妙な方向に曲がった盗賊はその場に崩れ落ちた。

「早く立て」
頭を押さえているティオに手を貸して起こすと、蹴られた場所を素早くチェックする。
「傷は浅い。血が派手に出てるだけ」
「あ、ありがとうございます」
残っていた盗賊は遠巻きに二人を囲んではいるが、自分から斬りかかろうとしない。
トールのそばには今さっき殺されたものと別のもう一つ死体が転がっていた。
その盗賊は顔面に蹴りを入れられて倒されると、起きる間もなくブーツの裏で首を小枝のように折ってしまった。
仲間が瞬く間に3人も失ったために、彼らの間に狩られる側の恐怖

が生まれる。
互いに目配せをして先に仕掛けるように催すが、誰も自分から動こうとしない。
「冒険者がいたのか、ちくしょう！　どけ、俺がやる！」
リーダーが毒づきながら剣を構え、ビビッている部下を叱咤する。
トールを恐れて動かなかった部下たちも武器を構えて3人がトールに、1人だけがティオと対峙する
一番の脅威となるトールを数で片付けようと考えだろう。
だが、脅威が二人だけだと早とちりしたためにその作戦も失敗することになった。

今にも斬りかかろうとした二人の回りにパチパチ火花が散ったかと思ったら、いきなり電気が走って感電させた。
いきなりの出来事にティオも含めて唖然としてしまった。
感電した二人は死んでおらず呼吸しているけれど、陸に打ち上げられた魚のようにピクピク動くだけだ。
魔法を唱えたセレハートは馬車の上で仁王立ちして盗賊たちを睨み付ける。
「はいはい、あなたたちに勝ち目はないわよ。逃げるなら見逃してあげるから、さっさと諦めなさい」
小馬鹿にした口調に盗賊たちはカッとなって前に出ようとしたが、セレハートの前にトールが立ちはだかると怯えて後ろに後ずさる。
リーダーは完全に飲まれている部下に舌打ちを打つ。
「それとも皆殺しがいいかしら？　あなたちぐらいなら1分も時間はかからないわよ」
しばらくセレハートとトールを交互に見ながら考えていたが、やがて剣を鞘におさめて両手を上げた。
「……チ、わかった。俺たちの負けだ」
そう言って部下を叱咤して馬に跨る陽に命令する。
「今日は運が悪かった。あんたたちみたいなベテランの冒険者とぶ

つかっちまうなんてな」
「あら、生きて帰れるのよ?運がいいと考えなさいよ」
「言ってろ」
リーダーは肩をすくめると、未だ剣を構えているティオを見て鼻を鳴らす。
「武器はしまいな、ルーキー。おまえらの勝ちだ。いつまでもガチガチになってんじゃねぇよ
「な、なんだと!」
敵に馬鹿にされて顔を赤くしたティオがリーダーに掴みかかろうとしたが、軽く腕をひねあげられて返り討ちにされてしまう。
「あいたたたたっ!」
「まだまだ素人に毛が生えた程度だが、ま、頑張ればいい線行きそうだな」
そう言ってティオを突き飛ばすと自分の馬のもとへ歩き出そうとした。
怒りも収まらないティオは去ろうとする盗賊の背中を睨み付ける。
「仲間が殺されたのにサバサバしてましたね……」
「うーん、盗賊稼業もつらいからね。そういうことには慣れちゃったんじゃない?」
「慣れるんですか?」
「慣れるしかないの――」

突然耳障りな羽音が鼓膜を打つ。
ティオが驚いで見上げれば、人よりも2匹大きな蜻蛉が頭上を通り過ぎるところだった
しかもその蜻蛉は長い鎌状の前足で鎧を着こんだ人間を運んでいた。
去ろうとしていた盗賊たちも驚いて声を上げる。
セレハートが長い溜息をついて額に手を当てる。
「勘弁してよー。なーんでこんな所でアイアンドールに見つかるかなー」

２匹の蜻蛉はティオたちの頭上を飛び過ぎた後、ゆっくり旋回して戻ってこようとしていた。
トールはなにが起きているのか理解できておらず茫然としているティオの肩を叩いた。
「構えろ、死ぬぞ」
どうやら本当の闘いはこれからのようだ。

いきなりバトル！（後書き）

はい、盗賊との戦いは終了しましたが、次はもっとやばそうなのと戦います。

VSアイアンドール

「先手必勝！　一撃必中！　敵を粉砕しなさい、ファイアショット！」

セレハートの周囲から複数の火の玉が生まれると、向かってくる二匹の蜻蛉に勢いよく飛んで行った。

蜻蛉は自分より大きい鎧を持っているのに、急激な旋回をかいて回避行動をとる。

二手に分かれた蜻蛉の間を火の玉が過ぎていく。

しかし、火の玉はそのまま通り過ぎて消えずに、避けた蜻蛉の後をしつこく追いかける。

さらに正面からも追加の火の玉が蜻蛉を狙う。

1匹はジクザクに動きながら鎧の足が地面につきそうになるほどの低空を飛んで逃れたが、もう1匹はスピードを出して振り切ろうとしたが無理だった。

1発目に片翼をもぎとられクルクル回って落ちようとしたところで2発目、3発目が命中。

空中で黒焦げになった蜻蛉の破片が飛び散る。

運ばれていた鎧は投げ出されて地面に落ちて行った。

蜻蛉を1日仕留めた瞬間に見ていた盗賊たちが歓声を上げる。

「なに騒いでるの！　まだ1匹いるわよ！」

トールが鎧の落ちて行った場所に向かって走り出した。

セレハートが厳しい声で叱咤しながら掌から雷を撃ちだす。

雷は真っ直ぐに飛んでいた蜻蛉の体を貫き、その体を爆散させた。

しかし、蜻蛉が運んでいた鎧はすでに地面に落下していて盗賊のリーダーの前に大きな音を立てて着地した。

間近で見る鎧の迫力に圧せられたティオは唾を飲み込む。

鎧は2メートルを超える鎧は黒を基調としていて、真っ白な骨が肩や胸についている。
手には盗賊たちが持っているものよりも破壊力を誇るメイス。
反対の手に持つ縦長の鋼鉄の盾と兜の側頭部には不気味な目が浮かんだ太陽が描かれ、顔を完全に覆う鎧の試合のために空いた隙間から赤い光が漏れている。
初めて重装甲の鎧をみたティオはその迫力に圧されて後ずさる。
なんというか、人間らしさが感じられなかった。
「ぼうっとしてないで！　来るわよ！」

アイアンドールがそばにいたリーダーに襲い掛かる。
乗っていた馬の首にメイスが半ばまで食い込み、血を吹き出しながら倒れる。
「俺の馬が！　このぉ！」
落馬したリーダーは転がるようにアイアンドールの懐に入り、起き上がり様に鎧の隙間がある腹に剣を突き刺した。
両手に力を込めて柄本まで突き刺したリーダーは勝利を確信して笑みを浮かべたが、その顔面に盾が叩きつけられる。
リーダーの顔が潰れて口から折れた歯と血を吐き出す。
そして無慈悲に薙ぎ払ったメイスを受けて頭がひしゃげ、血と潰れた脳症が勢いよく吹き出す。
明らかに死んでいるのにメイスはもう一度振り下ろされ、リーダーの頭は弾けて下顎を残して無くなった。
リーダーがあっけなく殺されたのを見て残された盗賊たちは悲鳴を上げて逃げ出した。
地面を転がるリーダーの死体を目で追いかけたティオはゆっくりと、次の獲物を自分に決めて近づいてくるアイアンドールを見る。

頭の中が真っ白になってどうすればいいのかわからない。
呼吸ができなくて目の前が真っ暗になりそうだ。

人間があんな風に壊れるのを初めて見たティオは、ただ、怖くて涙を流して立ち尽くすしかなかった。

二人目を破壊しようとしたアイアンドールに雷が撃ちこまれる。
前にかざした盾で防いだが、その威力に圧されて巨体がうしろによろける。
ティオの頬が雷をかすめて皮膚が焦げる。
その痛みに意識が戻って我に返った。
「魔物を前に何やってるの！　男の子でしょ？　しっかりしなさい！」
もう一度、セレハートの掌から生まれた雷がアイアンドールに撃ちこまれるが、また盾に阻まれてしまう。
アイアンドールが縦を前にメイスをティオの胸目掛けて突き出す。
体が固まっていたティオは横に移動してメイスを避けたが、体にぶつかって弾き飛ばされた。
アイアンドールはそのまま勢いをつけて肩からばしゃにぶつかる。
「うわぁ！」
馬車が揺れて驚いた馬が鳴いて走り出す。
身構えていなかった商人が驚いて転がり落ち、セレハートは着地するなり素早くアイアンドールから距離を取った。
「大丈夫？」
「は、はい、大丈夫です……」
立ち上がったティオは急いで服の裾で涙を拭った。
「すいません、馬鹿やってました……」
「まぁ、そこは冒険者成り立てってことで見逃してあげる。
けど、いい？　あいつはあなたが相手をするのよ」
ティオの顔が緊張で強張る。
「トールが駆けつけるまで耐えたら私たちの勝てるわ。
だから、それまであなたに耐えてほしいの。もちろん私も援護してあげる。

出来る……？」
「……やります！」
「よし、あいつの弱点は顔だから、そこを狙うんだよ」
「はい！」
力強く頷いたティオは深呼吸をしてから、アイアンドールに向かって走り出した。
ゆっくり動いてる馬車によじ登って逃げる商人を捕まえようとしていたアイアンドールの背を斬りつける。
刃が鎧の表面を削って火花を散らす。
振り返りざまにメイスを振り回してティオを叩き潰そうとしたが、素早く下がったために空振った。
追いかけようとしたが足元に火の玉が爆発して、衝撃を受けきれずに巨体が膝をついた。
「今よ！」
セレハートの声にティオは慌てて追撃しようとしたが、アイアンドールがメイスを振り回すために近づけない。
「私の魔法に合わせて！」
「はい！」
アイアンドールが盾を突き出して押し倒そうとする。
避けられないと判断したティオは両手をクロスして受け止める。
体重差に負けてティオの体が押されるが、歯を食いしばって耐える。
セレハートが再び援護しようと、今度はアイアンドールの頭上に人の頭よりも大きな氷の塊を精製する。
アイアンドールは咄嗟に一歩下がって盾を翳して受け止めた。
盾にぶつかった氷が砕けて飛び散る。
いきなり盾をずらされたためによろけてアイアンドールの体にぶつかってしまった。
頭をぶつけて涙が浮かんだが体が密着した今、メイスはその威力を発揮できない。
剣を突き出して首に突き刺した。

「このぉ！」
アイアンドールが盾を手放してティオの頭を掴んで引きはがそうとする。
頭が握り潰されるんじゃないかと思うほどの握力だが、剣を握り直してもう一度首を刺した。
が、いくら首を刺してもアイアンドールは倒れず、密着するティオを引きはがそうと今度はメイスの柄を頭に押し付ける。
セレハートが叫ぶ。
「頭だって！　首に刺しても意味ないってば！」
「え？」
その時になってやっとティオも違和感に気が付いた。
昔感じた肉を突き破る感触がせず、鉄と鉄が擦れる音しかしない。
そして刺している場所からは血が流れず、代わりに黒い煙が漏れるばかり。
「え？　え？　ええ！？」
驚いたティオは目を丸くして離れようとしたが、力が抜けたために突き飛ばされてしまった。
尻餅をついたティオは動揺しながらもすぐに立ち上がろうとしたが、アイアンドールの足が腹にめり込む。
「っ！？」
皮鎧でも殺しきれない衝撃が腹を襲い、小柄な体が地面を転がる。
なんとか地面に手をついて起き上がろうとしたけれど、我慢できずに胃の中のものを地面にぶちまける。
父との訓練でも感じたこともない痛みに視界が霞む。
早く構えないと死ぬのに、足元がふらついて剣が構えられない。
セレハートがティオに近づけさせまいと魔法を撃つけれど、アイアンドールは盾で防御しながら彼に近づいてくる。
「くそ、こんなところで終わってたまるか……」
荒い呼吸を繰り返し、近づいてくるアイアンドールを睨み付ける。
アイアンドールが人間を殺そうとメイスを振り上げる。

鎧が掴まれてアイアンドールの巨体がうしろに引っ張られる。
そしてそのまま足を引っかけられて、仰向けに倒れてしまった。
自分より大きいなアイアンドールを引きずり倒したトールはティオの状態を素早く確かめる。
「肋骨が折れてる。マスターに直してもらえ」
それだけ言うとアイアンドールを相手にするべく向き合う。
セレハートはティオを馬車のそばに引っ張っる。
その時、トールに二カッと笑いかけた。
「トール、新人いじめする悪い子を懲らしめてあげなさい」
「了解」
勢いをつけて起き上がったアイアンドールが新しい人間を標的に選んだ。
真っ直ぐにトールに殴りかかるのではなく、そばに落ちていた盾を掴んで投擲する。
もちろん受け止めずにしゃがみ込んで避けたけれど、それを読んでいたアイアンドールはすぐに距離を詰めてメイスを振り下ろす。
トールはしゃがんだ姿勢、陸上選手がスタートダッシュから前に飛び出して両の拳を腹に叩き込んだ。
巨体が体をくの字に曲げてうしろによろめく。
さらに弧を描いたブーツの踵が脇腹を強打、鎧が甲高い音を立てて凹む。

治療を受けていたティオは信じられないものを見て、空いた口を閉じることができなかった。
その様がおかしくってセレハートはつい笑ってしまった。
「そりゃ、驚くよね。なんてったってうちの子は特別だもん」

その間にもトールは確実にアイアンドールの体を傷つけていく。
大きく振り回されるメイスをわずかに体をずらして避けながら、振

り切ったタイミングを狙って拳を叩き込んでいく。
見ている間にもアイアンドールの鎧にヒビや凹みが生まれ、そこから黒い煙が漏れてくる。

「と。トールさんも凄いですけど、あ、あれもなんなんですか？」
「あれはねぇ、私もわかんないけど、誰かが作り出した魔物の１つみたいよ
人間だけを殺すようにプログラムされた殺人兵器ってところかしら」
「魔物……！？」
自分が相手をしていたのがモンスターよりも危険な魔物だったことに今更知って、もう何度目かわからない驚きと自分が生き残れた幸運が信じられなかった。
「ほら、そろそろ終わるね」

振り下ろしたメイスがトールを掠めることなく地面に刺さる。
回り込んだトールは相手の膝裏に蹴りを入れて跪かせる。
そして狙いやすくなった顔に体重を乗せた掌底を叩き込んだ。
バイザーがひしゃげて大量の黒い煙が外に流れ出す。
トールは躊躇せずに煙が溢れ続ける兜の中に手を突っ込んでなにかを引っこ抜く。
抜いた瞬間、アイアンドールの体中から煙が一気に噴き出し、次には鎧が粉々に砕けて地面に落ちる前にスゥッと消えた。

敵を片づけたトールは引っこ抜いたものをセレハートに渡す。
「はい、お疲れ様」
それは真っ赤に輝く石だった。
セレハートは上にかざしてティオに見せる。
「これがアイアンドールのコア。これを壊すか鎧から剥がせば倒せるわ」
「へぇ、そうなんだ」

ティオはまじまじとその石を眺める。
最初はただの綺麗な石かと思ったけれど、よく見れば中心に黒い靄が見えた。
「これを冒険者ギルドに渡せばお金がもらえるよ」
そう言って赤い石をティオの手に握らせる。
「え、僕は何もやってな……」
「「いいの、いいの。頑張ったご褒美に取っておきなさい」
ティオは断ろうとしたけれど、セレハートは受け取らずにティオの頭をわしゃ話者と撫でる。
「ほら、治療も終わったことだし出発しよう。おじさん、馬車は大丈夫？」
「あ、ああ、後ろ側が壊れてるけど、何とか走れるだろう」
「それじゃあ、すぐに行きますか。少年も疲れてるしね」

荷台に座ったティオは自分の手が震えていることに気が付いた。
いや、手だけじゃなくて体全体が震えていた。
それに頭の中では盗賊のリーダーが殺された光景や、メイスを振りかざして迫るアイアンドールがグルグル再生されている。
ギュッと膝を抱えて震えを抑えようとするけれど、収まるところか余計にひどくなる。
「怖かったんだね」
ティオの頭をセレハートの手が優しく触れる。
「町に着いたら起こしてあげるから、今はゆっくり休みなさい」
「子供扱いしないでください……」
「ふふ、そうだね。君も冒険者になるんだもんね」
シープル。ティオの前に小さな羊が何匹も生まれる。
羊たちは淡い水色の光を発しながらティオの回りを楽しそうに飛び回る。
ティオは羊を視線で追いかけていたが、やがて瞼が重くなり、ついには眠り込んでしまった。

「それじゃ、ゆっくりお休みなさい」
ティオが完全に眠り込んだのを確認したセレハートは自分のマントをかけた。

VSアイアンドール（後書き）

戦闘終了です。
いきなりころされかけた主人公、これから冒険者として大丈夫だろうか？

モンスター
腹が減ったら人も襲う狂暴な動物。
群れで村を襲うことがあり、冒険者ギルドでも討伐依頼が来る。
狼や熊でも種類によってはモンスターに区別される。

魔物
自然の理から外れた外道のもの。
モンスターよりも危険な存在で、討伐には冒険者だけでなく軍隊や騎士団も出動するほど。
例としてはゾンビ、リッチ、ダークエルフなどなど。
人と同じように理性を持ち、独自の文化をもつ魔族とは違う。

街に到着！（前書き）

今回は会話だけです。
さらりと読んでいただけるとありがたいです。

街に到着！

馬車はアイアンドールの体当たりを受けたために、路面の衝撃がひどくなっている。
けれど魔法を掛けられたティオは深い眠りに落ちていて目覚めない。
だから体を揺すられて起こされたときも、ぼーっとしていて起こした商人の顔をじっと見ているだけだった。
「ほら、坊や。門についたぜ」
「え、あ、ついた……？」
寝ぼけ眼でキョロキョロ首を動かすけれど、もちろん馬車の中からじゃ外の様子はわからない。
その様子がおかしくて商人は吹いてしまった。
「なにやってんだよ。ほら、早く受付に行ってきた」
頭が覚醒していない状態で馬車を降りれば、目の前に馬車2台が並んで通れる大きな門がたっていた。
「や、おはよう」
大門の脇にある小屋の前でセレハートとトールが立っていた。
セレハートは肩掛け鞄に杖を持っているが、トールは背中に大きなリュックを背負い、さらに2つの袋を肩に下げている。
「おはようございます」
「よく眠れたみたいだけど調子は大丈夫？」
「はい、もう大丈夫です。トールさんも助けてくれてありがとうございました」
トールは軽く首を横に振る。
「大丈夫ならいい」

「セレハートさん、書類の申請が終わりましたよ」
そこへ小屋から門番が出て来てセレハートたちに町に入る許可が降りる。

「許可証はすべて確認しましたので、荷物は全て運んで大丈夫ですよ」
「そう、ありがとうね」
門番は一通りセレハートと会話をして書類を渡すと、ティオに早く中に入るように言って小屋に戻った。
「それじゃ、私たちはもう行くね」
「はい、いろいろありがとうございました」
「ふふ、どういたしまして」
セレハートはポケットから一枚の紙を取り出してティオに渡す。
見ればアルクェン研究所と住所が書かれていた。
「そこで私は働いているの。冒険者ギルドでクエストをこなしたら研究所においで。
ここでもクエストは受けられるよ」
「わかりました」
「それじゃ、またね」
セレハートとトールは別れを告げて――トールは軽く手を振るだけ――街の奥へと消えていった。

小屋に入れば二人の衛兵が座って書類を書いていた。
その内の眼鏡をかけたほうがティオに手招きする。
「街に来たのは初めてか？」
「いえ、来たことあります」
「そうか、なら説明はいらないな。この紙の質問事項を書いてくれ」
そう言って紙と鉛筆を渡される。
ティオはすぐに名前や村の出身を埋めていく。
職業の欄に進んだとき、まだ冒険者に登録していないのに書いていいのか迷ってしまった。
鉛筆が止まったティオの様子を不思議に思った衛兵が髪を覗き込む。
「どうした？」
「あ、いえ、冒険者になるために町に来たから、なんて書こうかな

ーって思って」
「ああ、それなら冒険者って書けばいいよ。そうか、冒険者になるのか」
ティオの体つきを見た衛兵は心配そうに顔を曇らせた。
「それにしては、早すぎないか？　まだ子供じゃないか？」
「……僕は成人してます」
ティオの言葉に衛兵は目を丸くする。
この国では１５歳になれば成人として扱われる。
が、目の前の少年はよく見ても１３か１４ぐらいに見えなかった。
信じられずにもう一度ティオを見れば、不機嫌そうな顔で見返された。
「そ、そうか、すまなかったな。ええとほかにわからないことはないか？
ない？　よし、それならもう行っていい。冒険者ギルドは４番地区に行けばすぐに見つかるよ」
「わかりました」
まだ子供扱いされたことに機嫌を悪くしていたティオはムスッとしたまま小屋を出て行った。

外では商人がティオのことを待っていた。
「おう、少年、受け付けは終わったな」
「ええ、終わりました」
子供扱いされたことにまだ怒りを感じていたが、商人に愚痴ることもできないので我慢する。
商人もティオが不機嫌になっているのに気付いたが、ここはあえて触れなかった。
「そうか、さっき嬢ちゃんから聞いたけど、冒険者になるんだって？
なら５番地区にあるアルバージって名前の鍛冶屋に行きな。
店は小さいて頑固な親父がやってるけど、腕は確かだ」
「わかりました。ここまで乗せてくれてありがとう」

「なぁに、あんたが頑張ってくれたから商品も無事だったんだ。礼を言うのはこっちだよ」
商人も馬の尻に鞭を当てて出発した。
「いい冒険者になるんだぞ！　頑張ったら商品を安く売ってやるからな！」
そう言って酒の入った瓶をティオに投げ渡す。
「うん、僕も頑張るよ！」
馬車が町の奥に消えていくのを見届けた後、ティオも冒険者ギルドへ歩き出した。

ポルトロの街は９つの地区に分けられている。
市役所や警察署、貴族の所有する建物が多い１番地区と７番地区。
店を構える商人や村から野菜を並べる村人が商いをする２番地区と３番地区。
冒険者ギルドがある４番地区と５番地区は冒険者が利用する武具や旅の道具が並んでいて、旅人や傭兵も利用している。
あとの６番、８番、９番は市民が住んでいる。
地区によって階級層が変わり、特に８番地区は危険で観光客は近づかないように注意されている。
６番地国も警察署はあるがこちらはモンスター討伐のために、１番地区よりも重武装な部隊が待機している。

門のそばにあった案内図を見てみると、観光客が立ち寄る建物の場所が示されている。
ティオは村で採れた野菜を売る時にしか来たことがないため、いろんなところを見て回りたい気持ちがあった。
しかし遊びに来たんじゃないと自分に言い聞かして真っ直ぐ冒険者ギルドに向かうことにした。
「あ、あれなんだろ？　時計塔？　おおきいなぁ」
遠くに観光名所として有名な時計塔を見つけてしまったティオは興

味に引かれるまま歩く向きを変えてしまう。

彼が冒険者ギルドに着いたのは時計塔と周辺の店を見て回った2時間後だった。

街に到着！（後書き）

も、盛り上がらねぇ……（汗）
お客様の中に飽きさせない文章の書き方を教えてくださる方はいらっしゃいませんか！？
マスケット銃は戦闘のない文章を書くのが苦手なんです！　誰かいらっしゃいませんかー！？

冒険者ギルド（前書き）

やっと冒険者ギルドに到着しました。
相変わらず会話ばかりです。

冒険者ギルド

「ここが冒険者ギルド……」
ティオは目の前の屋敷を見上げる。
他の民家よりも大きく威圧的な3階建てで石の壁に囲まれている。
万が一の時に籠城できるように高い壁に囲まれ、侵入を防ぐために窓は小さい。
そして2階、3階に突き出したバルコニーは射手が身を隠せるようにしており、屋根にも撃てるように戸がついている。
さらにいくつもの秘密があるがティオは気付くわけもなく、堂々とした建物の造りに感心するばかりだ。
「よし、行くか！」
期待に胸を膨らませて、ティオは扉を開けた。

大小のテーブルについて何か話し合っていた冒険者たちが扉の開く音に釣られて振り返る。
一目で場数を踏んだと分かる冒険者たちの視線に晒されて、ティオは一瞬身を強張らせたが気を引き締める。
受付けは奥のカウンター。そこを目指して冒険者たちの間を進んでいく。
ティオを値踏みするように見ていた冒険者たちは懐かしむように笑みを零す。
「へぇ、新人だな」
「大丈夫なの？　まだ子供じゃない」
「かわいい子ね。お兄さんがいろいろと教えてあげたいわ」
冒険者たちのからかい交じりの言葉――粘着質な視線も感じる――は無視する。
手前のカウンターにいる女性スタッフに声をかける。

「はい、いらっしゃいませ」
「すいません、冒険者の登録をしたいんですが」
「冒険者志望ですね。では、こちらの書類に記入をお願いします」
そう言って渡された紙は門前の小屋で書いたものと似ていた。
ティオはすぐに埋めて、スタッフに渡す。
スタッフはさっと目を通して書き落としか、書き間違いがないかをチャックする。
そして間違いがないことを確かめる。
「宿泊はどうしますか？」
「あ、宿をお願いします」
宿は冒険者ギルドが用意した宿泊施設で、一般の宿屋よりも安い金で泊まれる。
また、紙が渡されたので今度はサインと利用期間を記入する。
とりあえずは3ヶ月間利用することにして宿代は3回に分けて払うことにした。

ちなみに宿は1月ごとの契約で、1月に払う金額は二万四千エルク。
1日八百エルク程度の計算で、一回の食事が三百エルクだから安い値段だと思う。
そして冒険者登録するには五百エルク払う。

「では、登録費と宿の一月分料金として二万四千五百円になります」
事前に父からいくらかかるか教えてもらっていたティオは財布とは別に封筒からお金を払う。
この金は冒険者になるためにこつこつ貯めてきた物で、このために貯めてきたとはいえ、封筒の中が一気に減るのは寂しい。
が、このために貯めてきたんだから躊躇うな！　と心の中で自分を叱咤する。
けれど気持ちが表情に出ていたために、スタッフはお金に伸ばした手を止めてしまった。

捨てられた子犬のように見えてしまったが、心を鬼にして差し出されたお金を数えていく。
「では、登録はこれで終了します。次にギルドでのクエストの受け方について説明しますか？」
「お願いします」

スタッフはわかりましたと頷くと、書類を同僚に渡して手帳ほどの大きさの冊子を取り出した。
その冊子を机の上に開いてティオに見せる。
「冒険者の登録ができましたので今日からクエストが受けられるようになりました。
クエストはあちらに張ってあるボードに張ってありますので、受けたいものを取って受け付けに持ってきてください」
そう言って脇の壁にあるボードを指さす。
そこには大きさがばらばらの紙がボードを埋め尽くしていて、冒険者たちが受けるクエストを選別している。
「過去に狩ったモンスターから受けられるクエストは判断されます。ですので、最初は受けられるものは限られますが、冊子の裏側に書いてありますモンスターを倒して行けば受けられるクエストは増えていきますよ」
そう言ってページの後半を開くとモンスターの紹介が乗っていた。
写真の横に名前と生息地、攻撃方法などが書いてあり、下には星が書いてある。
スタッフは最初のページに乗っている、星の数が1つしかないモンスターを指した。
「星の数は強さを表していますので、最初はこのモンスターを狩ることをお勧めします。
星が2つまでなら一人でも大丈夫ですが、3つのモンスターを狩るときは必ずチームを組んでください」

星2つのモンスターを眺めていたティオはその中からアイアンドールを見つけて、ついスタッフの説明を遮ってしまった。
「こいつって星2つなんですか！？」
「あら、アイアンドールを見たことあるの？」
「ええっと、、ここに来る途中で襲われたんです……」
そう言いながらアイアンドールの説明を改めて見る。
アイアンドールは捕食も睡眠もとらない特異な魔物で、剣や槍のほかにマスケット銃を使用してくる。
唯一の弱点である頭に埋め込まれた石を破壊すると消えてしまうので、魔物の専門家も死亡解剖や生体実験をすることができず、未だわからないことが多い魔物だそうだ。
「その時は一緒にいた人たちに助けてもらったんです。とても僕一人で倒せる相手じゃなかったです……」
「そうですか、でも一人で倒せない相手でもチームを組めば対処することができます。
今は冒険者としていろいろ学んでください。私も勉強しながらクエストをこなしてましたよ」
「え？」
スタッフはくすっと笑って胸に手を当てる。
「私も冒険者だったんです。だからなにがあったら私に尋ねてくださいね」
「は、はい！」
「じゃあ、とりあえず最初に覚えておくべき所はこれぐらいです。冊子は差し上げますので読んでおいてくださいね」
「ありがとうございました」
「お疲れ様でした。これから頑張ってね」
ティオが礼を言えば、にっこり笑って手を振ってくれた。

「チームを組めば倒せる、かぁ……」
クエストボードを眺めながらスタッフが言ったことを思い返す。

父が言っていた意味を、まさかこんなに早く理解することになるとは思わなかった。
アイアンドールと戦った時もセレハートがアドバイスをして魔法で助けてくれたから撲殺されず、この手で一矢報いることができた。
いや、彼女がいたからこそ、逃げずに戦うことができた。
「早く仲間を作ろう……！」

冒険者ギルド（後書き）

初クエストはまだ先になりそうです。

一日目、終了（前書き）

村から町までの距離を一週間から一日に大幅に短くしました。

一日目、終了

「おい、少年。今からクエスト行くつもりか？」
後ろから声をかけられて振り返れば、顔に酷い火傷の跡が残る男が立っていた。
ベテランだろうか、傷ついた鎧や使いこまれた槍から、彼がベテランであることを物語ってる。
「はい、そうですけど……」
男はくいっと壁に掛けられてる時計を指さす。
釣られるように見れば、時計の長針は４時を指していた。
「もう日が暮れる。夜に１人で行くのは自殺するようなもんだ」
「あう……」
せっかく初クエストに挑戦しようと思っていたけれど、先輩の警告を無視するわけにはいかない。
「まぁ、初心者用のクエストはなくならないから、明日探せばいいだろ」
男は落ち込んだティオを励ますように肩を叩く。
「わかりました。明日クエストをを受けます」
「それがいい。朝に来ればお前さんみたいな新米も集まるから、パーティを組んでいけばいい。
あと最初に受けるクエストはこれがいいだろ」

そう言って示したクエストはザブルピッグ３頭の討伐。
近隣の村から依頼されたもので、畑を荒らすモンスター３頭を対峙してほしいとのことだ。
報酬は１０００エルク。
先程もらった冊子を開いてザブルピッグを見てみる。
一般的な豚よりも筋肉質で食欲旺盛。
基本的に食べるか寝ることしかしないが、攻撃されると突進してく

る。

「あ、これならなんとかなりそう」
「だろ、でも3頭もいるから誰か誘って行けばいい」
「うん、これを受けます」
「それじゃ、頑張れよ」
もう言うことはないと判断した男は軽く手を振ると、二人の男女が座っているテーブルに座る。
仲間らしく男がティオを指さして何か話すと、二人は納得したのか頷いている。
「それじゃ、今日はどうしようかな……」
クエストを諦めたティオは空いた時間をどうしようか迷ったけど、武具屋に言ってないことに今さら気が付いた。
さらにここに来るまでにアイアンドールと戦っているのだから剣の状態も確かめないとまずい。
とんでもない状態でクエストを受けようとしていたことに、ティオは自分の悪露小朝に頭を抱え込みたくなった。
「と、とりあえず宿で荷物おいてこよう」
若干、この先やっていけるのか不安になりながら宿へ向かうことにした。

冒険者ギルドが経営する宿はギルドのすぐ裏にある。
こちらも護りを重視した4階建ての建物だ。
中に入るとカウンターにいた体が丸くて顎髭を生やした巨漢が愛想よく笑って出迎えてくれた。
「さっきギルドから連絡があって待ってたんだ。君が新米君だね」
「えっとティオ・アルペノスです」
なんだか強面な人だなと思ってしまっていたので、見た目を裏切る愛想のいい態度にティオは面食らってしまった。
「私はクァンシーだ。ここを経営している者だよ」

そう言ってカウンターに数字が書かれた木の板がついた鍵を指し出す。
「これが君の部屋だ。２階の１４号室。トイレは各階にあるし、大浴場が一回にあるから利用してくれ」
「わかりました」
「なにかわからないことがあれば私に聞いてくれよ」
「はい、ありがとうございます」
親切な人だなぁと思いながらティオはクァンシーに礼を言って階段を上る。
２階に上がると壁に１号室から１５号室は左側に、１６号室から３０号室が右側に曲がるように書いてある。

右に曲がって奥に行けば、ティオの持っている鍵の札と同じ数字が描かれたドアを見つけた。
畳３畳分ほどの部屋は小さな机が置いてあり、ハンモックが壁に掛けられている。
ただ寝る為だけの安い部屋。
父から聞いていたとはいえ、こ我が家が恋しくなる寂しさである。
とりあえずは荷物を置いて外に出かける。
今日からここがティオの活動拠点。
頑張って気持ちいいベットの上で寝れるように頑張ろう。ティオはそう心に決めた。

「お、さっそくクエストに行くのかね？」
一階に下りて新聞を読んでいたクァンシーに鍵を渡す。
「いえ、夜になるから止めとけって人に言われたから、武具屋とか見に行ってきます」
「それがいい。ベテランでも夜の森とかに入ったら命がないからな」
「それで聞きたいんですけど、５番地区にアルバージっ武具屋を知ってますか」

「アルバージ？　……ああ、知ってるよ」
クァンシーは考えるように顎髭をいじっていたが、思い出すとカウンターからメモを取り出すと簡単な地図を描いてティオに渡す。
「あそこは小さいけど掘り出し物が見つかるって話だ。けど、よくあんな店知ってるね」
「人から聞いたんです」
「ほう、そうなのか。まぁ、用事をさっさと済まして帰ってくるんだよ」
「うん、ありがとう」
ティオはここでも子供扱いされてるようで悲しくなったけど、善意で言ってくれてると分かってるからなんとも言えなかった。

街はもうすぐ暗くなるためか買い物してる主婦や遊んでる子供の姿は少ない。
いや、この地区を利用する主婦はもともと少ない。
いくつか店を覗いてみると、長旅に耐えられる靴や丈夫な衣類を扱っている。
衣類を扱う店では冒険者が持ち込んだ毛皮を渡して店員となにやら話し込んでいた。
遠くから見たのでよくわからなかったが、その毛皮は折りたたまれた状態でも台にからはみ出すほど大きかった。
道端でもシートを広げて干し肉や塩漬けした魚を売っていて、剣や槍を持った冒険者が品定めしている。
その様子を眺めながら、クァンシーが書いてくれた地図の通りに歩いてアルバージと看板を下げた店についた。
アルバージは他の店よりも小さめで、ドアにかかっている交差する剣が掻かれた看板がドアの前に下がっているだけだ。

中に入ればムッとした臭いが鼻を衝く。
店内には武具が乱雑しておかれていた。

壁に所狭し並べられてるだけでなく、詰め込まれた樽が置いてある。
客に勝ってもらう気がなく、持っている武器を置いただけのようだ。
店の奥では小柄な老店主が研いでいた剣を置いて顔を上げると、入ってきたティオを品定めする様に素早く体を見る。
そして、何か引っかかるのかティオの顔を凝視する。
大量に並べられた武器に感動してキョロキョロ首を動かしてみていたティオは店主の鋭い視線に気づいて、無意識に姿勢を正した。
「新米か……。何の用だ」
「あっと、これの手入れをしてもらおうと思ってきました」
ティオは急いで腰から剣を抜いて店主に見せる。

店主は無言で受け取ると鞘から引き抜いて注意深く刃を確かめる。
一瞬だけ唾に触れた手がとまったが、すぐに手を動かす。
何も喋らないまま見る角度を変えたり、手で刃に触れていく。
そして時間をかけていく内にだんだん店主の顔が険しくなっていく。
「おい、なにか硬いものに刺しただろ？」
「え？」
「え？じゃない。刃の腹と切っ先が酷いことになってる。
何も考えずにがむしゃらに突き刺しただろ」
そう言われてアイアンドールの首に何回も突き刺したことを思い出した。
今思い返して見れば、剣の切っ先が鎧の内部にぶつかっていたかもしれない。
「あ、そういえば……」
「少しは大事に扱ってやりな。相当使ってるみたいだが、雑に扱えばすぐに駄目になる」
剣の状態を確かめ終えた店主は紙に何かを書き込んでいく。
「とりあえずこれは預かる。明日の朝には治しておいてやる。名前は？」
「ティオです。ティオ・アルペノスです」

「アルペノスね……」
店主は書き終えた注文書をティオに渡す。

「いま金に余裕はあるか？」
「え、あ、ちょっと待ってください……」
いきなり懐を聞かれて驚きながらポケットから財布を出す。
村で牛泥棒を捕まえたり、小型のモンスター退治をして貯めた小遣いだが武具を買うほど金があるとは思わない。
いや、ここで使ってしまうとこれからの生活が困ってしまう可能性が高い。
言葉に迷っていると、店主はその様子で分かったらしく鼻を鳴らした。
「そこにある丸い盾を手にとってみな」
店主が指さした物を言われたとおりに取ってみる。
飾り気のない盾は丸みを帯びた円形で、持ち手が手で固定できるようになっているから重い一撃も受け止められそうだ。
しかも小さいために腕の負担も少なく、つけた瞬間にティオはこの盾を気に入った。
「それは３０００エルクだが、２０００エルクに負けてやるよ」
「え、いいんですか！？」
「まぁ、冒険者になりたてのようだからな。少しぐらいは負けといてやるよ」
「あ、でも……」
財布を見たティオは今まで喜んでいた表情から一遍、しょんぼりと悲しそうに俯く。
いきなりの変わり方に店主も動揺する。
「ど、どうした？」
「財布……１５００エルクしかないです……」
そう言って財布の中身を店主に見せれば、確かに１５００エルクしか入っていない。

店主としてはもっと金を入れてから来いと言ってやりたがったが、ティオの寂しそうな顔を見ると怒鳴る気持ちが鈍って強い待った。もともと商売の才能がないし、金儲けにも興味がない店主は投げやりに手を振った。
「わかった。１５００にしといてやるよ」
「本当に！　ありがとうございます！」
また嬉しそうな笑顔に戻って――しっぽがついてたら千切れるほどパタパタ振っていただろう――１５００エルクを払うと手に入れた盾を抱きしめる。
「それじゃあ、剣は明日の朝に受け取りに来い。値段は注文書に書いてあるから忘れるなよ」
「はい、わかりました！」
ティオは深く頭を下げて礼を言って店を出て行った。

残された店主は疲れたと溜息をつくと、改めて預かった剣に触れる。
「親子３代で来てくれるのは嬉しいが、あんな子犬で大丈夫なのか？」

武具屋を出た後は並んでいる店を適当に見て宿に帰った。
買ったものは珍しい薬草を数種類、モンスターが出てくる場所を記した手作りの地図を購入。
明日のクエストに持っていくものをリュックからウエストポーチに詰め替えていく。
忘れ物がないかリュックをあさっていると、赤い石を見つけて手が止まった。
「明日からクエストか……」
もう一度、自分を殺そうとしたアイアンドールの姿を重い和えす。
今は思い出すだけでも身震いするけど、必ず倒して見せる。
決意を固めるように石を強く握った。

一日目、終了（後書き）

早く戦闘書きたいです、センセー……。
戦闘シーン書いてたほうが楽ですねぇ

初クエスト決定（前書き）

今回、初めてクエストを受けることになりました。

初クエスト決定

次の日、ティオは急いで朝食を詰め込んで宿を出た。
一番に向かうのはアルバージの武具屋。注文書を見ると朝の7時から開いているらしい。
さっそく店に入れば、昨日の店主がタバコを吸いながらコーヒーを飲んで寛いでいた。
「ああ、来たか」
店主はティオの姿を見ると立ち上がって、店の奥から預けた剣を持ってきた。
「ほれ、次からもっと大事に使うんだな」
試しにさやから半身だけ引き抜いてみれば、刀身が光を受けて反射する。
刀身はアイアンドールの鎧にこすれて傷ついていたのに、今ではその跡が一つも見当たらない。
薄く油が塗布されて光を反射する刃は美しく、切れ味が増しているように思えた。
愛剣の北直された姿に感動して声を上げてしまう。
「ありがとうございます！」
「ま、せいぜい頑張りな」
「はい！」
代金を払ったティオは頭を下げて、意気揚々と店を出て行った。

冒険者ギルドに入ると、昨日より大勢の冒険者がクエストを受けに集まっている。
張られた紙を前にクエストを話し合っているチームや一人どれにしようか決めかねてる冒険者。
昨日は人間しかいなかったけれど、長身で長い耳が特徴のエルフやずんぐりして背の低いドワーフもいた。

ティオは勧められたクエストの紙を探そうと、昨日張ってあった場所を探す。
が、そこには新しい「オオクマハチの巣駆除」や「トッカニア１０頭の討伐」と、上級者向けらしいクエストしかない。
他のところにないかと探してみたけれど、取られてしまったらしく見つからない。
試しに似たようなクエストはないか探してみたけれど、討伐系のモンスターは今のティオでは手も足も出ないものばかり。
「討伐は無理か……」
どれだけ探しても初心者が討伐できるクエストが見つからない。
出来るものといえば採取系か運送系と、冒険者じゃなくてもできそうなクエストしか見つからなかった。
冒険者ギルドに入ったときはやる気満々だったのに、今では見つけたクエストを前に萎えてしまった。
「あ、ティオ君」
その時、昨日相手をしてくれた受け付けスタッフがティオを呼ぶ。
なんだろうとカウンターに行ってみれば、チェーンのついた金属板が渡された。
「はい、認識票よ。身元を確認するために必要なものだから首につけておいてね」
「へー、こんなのつけるんですか」
金属板には名前と村の出身、冒険者ギルドの銀の剣を加えた鷲が彫りこまれている。
「そう、それがあなたの身分証明書だから無くさないようにしてね」
「わかりました」
ティオは受け取るとさっそく首に認識票をつける。
首になにかをつけることなんてなかったために、ひんやりした鎖が肌に触れて気になるけど、きっと慣れれば大丈夫だろう。
「ところで、なにかクエストは見つけられた？」

「あー、それが……」
ティオは肩を落として自分ができる討伐系クエストがないことを話した。
「はー、そういうこともあるものねー」
スタッフは手元にあるクエスト表を見て、ティオが受けられるものがないことを確かめた。
「今日は討伐系は諦めて採取系にするしかないわね。採取系でやれそうなのって……うん？」
なにがないのか探していると、うしろから同僚に声をかけられた。
「ん、なに？」
「そこにいる子は初心者なんだって？」
「ええ、そうよ。初めてクエストをやろうってところなんだけど、討伐系が無くてがっかりしてるのよ」
それを聞いた同僚は手元にある書類をスタッフに見せる。
「なら、採取系の依頼をしていいかな。いくつかの薬草が欲しいそうなんだ」
「どんなのって……なんでこんなにキノコが欲しいの？」
「ギルド長の息子さんだよ」
「ああ……」
見せられたクエストの依頼内容に首をかしげていたが、依頼者が誰なのかわかると納得して頷いた。
「でも、これだけの量を一人で取りに行かせるのは酷じゃない？」
「それなら大丈夫だ、もう一人の子にもお願いしている」
「あら、そう。ぞれじゃあ……」
スタッフは任せてもいいかと納得すると、今まで蚊帳の外だったティオに振り返る。
「ねぇ、ギルドからクエスト受けてくれないかしら」
「ギルドからですか？」
「そう、別に難しいものじゃないわ。簡単な採取系であの子と一緒に受けてほしいの」

同僚が冒険者を連れて戻ってきた。
冒険者はティオと同じ年端の少年で、ティオの持っているものより大きな剣を背負っている。
「アゾルっす。まだ新米だけどよろしく！」
アゾルと名乗った少年はそう言って勢いよく頭を下げるのでティオも釣られるように頭を下げた。
「えっとティオです。僕はこれが初めてのクエストなんでよろしくお願いします」
「まじっすか！　俺もまだ１週間ぐらいなんすよ！」
ティオが自分と同じ新米ということに安心したのか、アゾルはほっと胸を撫で下ろす。
が、いろいろと話そうとしたところでスタッフが咳払いをして止める。
どうやらアゾルという少年は活発な人間らしい。
「クエストの話をするわよ」
そう言って二人の前にクエストの紙を置いた。

クエストは採取系。
アカドキノコ×５　アオヤキノコ×５　キイロデキノコ×５
報酬　１５００エルク

「キノコは街から南にある森で採れるわ。危ないモンスターはゴブリンとポポロね。
でも、奥に行けば行くほど強いモンスターが出てくるから気を付けてね」
「了解っす」
「わかりました」
二人はクエストの紙に名前を書いた。
「それじゃあ、しっかり準備していくのよ」

こうしてティオの初めてのクエストはキノコ採取に決まった。

初クエスト決定（後書き）

初めてのクエストは採取系になりました。
面倒臭そうだけど頑張れ、主人公！

キノコ採取（前書き）

今年はこれで終わるんですねぇ。
神社のバイトが大変だけど楽しい。

キノコ採取

街の南に位置するアラノ森。
いつモンスターに襲われるかわからない危険な地。
最初は武器を手に警戒しながら進んでいたが、あまりにもなにも怒らないため今では普通に会話して歩いていた。
「へー、ティオって魔族と人間のハーフなんすか！」
「うん、母さんが魔族だったんだ」
「じゃあ、ティオは魔法が使えるんすね！」
アゾルは期待に目を輝かしてティオを見る。
魔族は人間と身体能力が高く、冒険者のチームでは魔力もあるために剣と魔法を使い分けて戦う人が多い。
が、今のティオはそんなかっこいい戦いをできるわけがない。
「魔法は使えるけどさ、ランタンに火をつけるために指から火を出したり、泥水を綺麗にするぐらいしかできないんだ」
そう言って自分の尖りきみな耳を触れる。
攻撃魔法を使いこなす母曰く「クエストをこなして覚えていくのも楽しいものよ」と言って教えてくれなかった。
ティオとしてはもっと強い魔法を教えてもらいたかったが、父との訓練と狩りや手伝いで精いっぱいだからそんな時間はなかったと思う。
「だからいろんなクエストをやって覚えていくつもりなんだ。ごめんね」
「ふーん、そうなんすかぁ」
アゾルは少し残念そうに呟いた。

「それよりキノコの生えてる場所って知ってるんですか？」
ティオがなんとなく尋ねてみると、アゾルは得意げに自分の胸を指さす。

「おれ、キノコがどこにあるのか覚えてるんすよ」
「本当に？　ならこのクエストは楽勝だね」
「任せるっす！」
そういうとティオを置いて一人森の奥へずかずかと進み始めてしまった。
「え、ちょっと待ってよ！」
「早く来ないとおいてくっすよー」
新しい相棒に若干の不安を感じながら、ティオは慌ててアゾルの後を追いかけた。

街の時計塔よりもはるかに高い樹を中心に広がる森は奥に行けば行くほど珍しい薬草や鉱石が手に入るのだが、その分だけモンスターも強力になっていく。
冒険者の初心者は森に入ったばかりのところで弱いモンスターを相手に異形との戦い方を学んでいき、腕を上げることに奥に進んでいく。
任せろというだけあって、アゾルはクエストの目的となるキノコがどこにあるのか把握していた。

まず1つ、アカドキノコ。
傘が広い赤と黒のキノコで食べてもまずいし舌が痺れる物だが、火薬に混ぜれば湿気に強くなり雨でも使えるようになる。
キノコはどこでも手に入る物だが、場所によって質が変わる。
アゾルはティオの胴回りよりも太い木の下に案内して、街でも高価格で売れる質の高いキノコを手に入れる。
採取したキノコの毒々しさに眉を顰めながら、試しに臭いを嗅いでみる。
「食べたら下が麻痺するから駄目っすよ」
「食べないよ！」
見た目からして食べる気が失せるとぶつぶつ呟きながら、ティオは

ポーチの中にキノコをしまっていく。
同じようにキノコを採取しながら頭の中で地形を計算していたアゾルは東のほうを指さす。
「ここからだと、そうっすね……。キイロデキノコを取りにいくっすよ。」
「わかった」
ティオは頷いて立ち上がろうとしたとき、茶色のウサギがじっとこちらを見ているのに気が付いた。
最初は無視してそのまま行こうとしたけど、なにげなくもう一本抜いたキノコを投げてみた。
ウサギはびっくりして後ろに飛びのいたそれがキノコだとわかると、ティオの顔とキノコを見比べて、すぐにその場で食べ始めた。
その様子に和んだティオはクスリと笑ってその場を後にした。

次はキイロデキノコ。
黄二つ並んだ岩の下にあるジメジメな地面に大量に生えていた。
黄色くて一つ一つが小さいこのキノコは衝撃を与えると光を発する珍しいキノコだ。
衝撃の強さに比例して強く光を発するので、洞窟の中で叩けばモンスターが光を嫌って逃げてくれる。
「これ鍋に入れて食べるとおいしいっすよね」
「そうだね。鍋の中で光るから見えづらいけど、おいしいんだよねー」
この地域ではキイロデキノコは鍋にして食べるのが常識。
まぶしさに目を細めながら、キノコのぷりぷりした食感を楽しむのである。
「今日さ、鍋食べに行かない？」
「いいっすね！　俺の仲間もよんでいい？」
「うん、いいよ」
ここがモンスターの潜む危険な地であることを忘れて、二人は帰っ

た後の予定を話し合う。
ふと、ティオの背後から草を踏みしめる音。
何気なく振り返ったティオはその姿勢のまま固まった。

子供より少し大きいぐらいの痩せこけた体は泥に汚れていて、下顎から牙が伸びている醜い顔の中で目が爛々と輝いている。
最初はキョトンとした顔でティオたちを見ていたが、だんだんと憎悪に歪んで低く唸り始める。
（ああ、やばいやばいやばい……！）
ティオは油断しきっていたことを激しく後悔しながら、腰から剣を引き抜こうとした。
人間を見つけたゴブリンは耳障りな雄叫びを上げると、両手に持っていたアオヤキノコを捨ててティオに飛びかかった。

キノコ採取（後書き）

それではみなさん、よいお年を！

VSゴブリン（前書き）

みなさん、明けましておめでとうございます。
今年もよろしくお願い致します。

VSゴブリン

ティオが腰に差した剣を抜くよりも早くゴブリンが腰にタックルする。
体格はティオのほうがあるけれど、不安定な姿勢で受けたためにタックルを受け止めきれずに倒された。
ゴブリンはティオの体に馬乗りになって腰布に挟んでいた石斧を振り上げる。
「この！」
左腕につけた盾を顔の前にかがげて石斧を受け止める。
左腕に走る衝撃。
歯を食いしばって振り下ろされる石斧から身を守る。
ゴブリンは躍起になってティオの顔を狙って何回も打ち下ろす。
が、５回も振り下ろすと、石斧の柄が乾いた音を立てて折れた。
悔しがって唸り声を上げると、折れた獲物を捨てて邪魔な盾を掴んでどかそうとする。
「さっさとどけぇ！」
そこにアゾルの大剣がゴブリンの首に当たる。
切れ味は今一だが重量がある剣は首の半ばまで食い込み、脛骨を圧し折った。
ティオは伸し掛かってくる前にゴブリンの死体をどかして立ち上がる。
「あ、ありがとう。油断してた……」
「終わってないっすよ。まだ来る……」
二人の周りからゴブリンの吠える声が響き、ガサガサと枝が触れる音が鳴る。
アゾルは大剣を肩に担くようにして構え、ティオは彼の背後を守るように背中を合わせる。
ティオは喉を鳴らして唾を飲み込む。

飛び出してきたのは2体のゴブリン。
それぞれが石槍と石斧を持って二人を挟み込むように飛び出してきた。
2匹は仲間が殺されたことに腹を立て、しきりに武器を振り回して吠えている。
そのうち石斧を持ったゴブリンがティオに、石槍を持ったほうがアゾルに襲い掛かる。
ティオは自分から前に出て剣を繰り出す。
剣と石斧がぶつかって火花が散る。
力に勝るティオの剣が石斧を弾き、バックハンドの要領で振るった2撃目がゴブリンの耳をこそぎ取る。
ゴブリンが痛みに悲鳴を上げて後ろに後ずさる。
大きなチャンスを逃さず、ティオは足を延ばしてゴブリンの薄い胸板を蹴りつける。
鉄板をしこんだブーツが肋骨を圧し折り、内臓に砕けた骨が突き刺さりつぶされた。
ゴブリンは胸を抑えて地面に蹲り、口と鼻から大量の血を吐き出す。
「このぉ！」
そして隙だらけの後頭部に剣を振り下ろした。
頭が叩き割れて、水風船が割れたように血とねばついた中身が弾け飛ぶ。
顔にも飛んで視界が塞がれてしまったが、構わずもう一撃を見舞う。
今度は右耳の上あたりから剣が入り、そのまま反対側の顎下に抜けた。
今まで使っていた時より格段に切れ味が増している。
ティオは驚くと同時に、愛剣を鍛え上げてくれた店主にアルバージの店主に感謝した。
アゾルが大剣を振り回し、ゴブリンが逃げるように下がって避け続

ける。
速さを犠牲に重量で相手を破壊する威力の高い大剣が唸りを上げてゴブリンの体を掠める。
が、本能で動くゴブリンを捕らえることができず、アゾルも悔しさに歯を食いしばる。
「おらぁ！」
痺れを切らしたアゾルは足を揃えると、自分の体をコマのように回して大剣を振り回す。
予想外の攻撃にゴブリンは足踏みを踏んだが、回転しきってバランスを崩したのをチャンスと見た。
大きく踏み込んで槍を突き出す。
よろめいたアゾルは避けきれずに肩を浅くだけれど斬られた。
「痛っ！」
倒れたアゾルに止めを刺そうとしたゴブリンの頭に石が投げられる。
振り返ると血が顔に付着したままのティオが盾を前にして構えていた。
ティオはそのまま前に出ようとしたが、石槍が足を狙って突き出され牽制される。
ティオが木を引いている間にアゾルが立ち上がる。
チャンスを逃したゴブリンが慌ててアゾルに槍を向けようとしたが、再び踏み込もうとするティオを前にその余裕はなかった。
「助かったッす！」
「行くよ！」

二人が同時に動いた。
挟まれた状況に焦ったゴブリンが胴体と顔を盾で守るティオの足目掛けて突く。
が、その行動を予想していたティオは片足を上げて避けると、そのまま足の裏で槍の柄を折ってしまう。
アゾルが横薙ぎに払った大剣がゴブリンの胴体を切断した。

千切れた胴体が回って宙を舞い。、内臓と血を撒き散らしながら地面に落下する。
地面を転がったゴブリンは苦しげに血と涎を吐きながら、逃げようと這いずろうとしたが大剣が振り下ろされて頭を叩き割られた。

ゴブリンに止めを刺したアゾルは腰からナイフを抜くと、上半身と下半身が分かれた死体から耳を剥ぎ取る。
同じように頭がめちゃくちゃになった死体からも耳を剥ぎ取り、それをティオに渡す。
受け取ったティオは訳が分からずに困惑した顔をアゾルに向けると、彼は二カッと笑って耳を顔の前にかざす。
「これ持ってけば受けられる討伐クエストが増えるっすよ！　ほら、星2つのモンスター討伐とか」
「あ、そういうことなんだ」
納得はできたけど、緑色の耳をそのままポーチに入れる気にはならなかった。
なのでそばの木から生える葉を千切って包むことにした。

「あと、これっすね」
そう言ってアゾルが次に回収したのは最初に倒したゴブリンが持っていたアオヤキノコを拾う。
そのまま食べればスースー感じるだけだが、薬草に混ぜることで殺菌効果を追加することができる。

これでアカドキノコ、アオヤキノコ、キイロデキノコ、全てを手に入れることができた。
「終わったー！」
「そろったー！」
全てあることを確認した二人はガッツポーズして叫んだ。

VSゴブリン（後書き）

ゴブリン
脅威度　☆×１
身長が１３０センチ程度で子供の背丈しかない貧弱な身体つき。
武器も石斧や石槍で、数に任せただけの戦いしかできない。
しかし、承久のゴブリンになると武器が充実し、組織立った動きができるようになる。

クエスト終了（前書き）

ゴブリンを見事に倒した2人、しかし喜んでいるのもつかの間……

？

クエスト終了

二人が喜んで手を打ち合わしていると、またあたりの草むらが騒がしくなり始める。
驚いて辺りを見渡せば、１０匹以上のゴブリンがティオたちを囲もうとしていた。
仲間が3匹も殺されたことに腹を立てているようで、叫びながらしきりに武器を木や地面にぶつけている。
「や、やばそうっすね……」
「まずいよ……」
耳を澄ませば遠くからもゴブリンの会話する耳障りな声と武器をぶつける音が聞こえる。
ティオは目を囲もうとするゴブリンたちから離さないようにしながらポーチを探る。
焦っているために見つけるのに手間取ったが、なんとかこの場を打開できるアイテムを掴むことができた。
ゴブリンたちの気を引かないようにゆっくりポーチから取り出したティオは小声で呼びかける。
「数えるよ」
そう言ってアゾルに持っていた物を見せると、彼も頷いていつでも逃げられるように身構える。

ティオは3本たてた指を折り曲げる。
3……。
遠巻きに5匹のゴブリンがティオたちの離れた位置から弓に矢をつがえて引き絞る。
2……。
さらにその奥から群れのボスだろうか、赤い角のついた兜と傷だらけの胸当てをつけたゴブリンが現れる。

1……。
すったマッチの火で球体から伸びた導火線につける。
火花を散らして火が導火線を伝って球体に近づいていく。
その音がティオに心強く感じて笑みを――緊張で歪んでいるけれど――浮かべる。
ゴブリンは仲間が冒険者を囲んだことを確かめると、持っていた棍棒を木にぶつけて攻撃の合図を出そうと――黄色の球体が顔にぶつかった。
「逃げろ！」
ぐるりと回れ右してティオとアゾルが走る。
一瞬遅れてゴブリンたちが追いかけようとしたが、視界を眩い閃光に視界を潰されて悲鳴を上げる。
閃光手榴弾。
球体の中にある火薬が炸裂して閃光効果を数倍に高めた（どうやって高めるのかはティオも知らない）キイロデキノコに衝撃を与える。
すると眩い閃光が周囲の生き物の視界を一時的に麻痺させることができる。
その威力を証明する様に直視してしまったゴブリンたちは目を抑えてしゃがみ込んでいる。
視力が戻るには時間がかかるため、逃げる誰も二人を追いかけることはできなかった。
「よ、よし、うまくいった！」
「このままダッシュでにげるっす！」
眼瞼を強く閉じていたのに目が白黒にちかちかするけれど、2人は一目散に街に向かって走って逃げた。

冒険者ギルド。
「おかえりなさい。キノコは採取できた？」
「で、できました……」
あれから勢いに任せて街まで走り切ったティオとアゾルは疲れ切っ

た状態でで冒険者ギルドに辿り着いた。
二人は採取したキノコをスタッフに渡す。
スタッフは受け取って契約書と見比べてキノコが全てそろっているか確認すると、満足そうに頷いて契約書に冒険者ギルドと自分の名前のハンコを押した。
「あとこれゴブリンの耳っす」
次に渡したのは切り取ったゴブリンの耳。
スタッフは平気な顔でそれを素手で掴むと、木箱に入れて別の紙になにか書いていく。
「よし、これで二人は星１つのモンスター討伐ができるようになったわ。おめでとう。
これ、報酬の１５００エルクね」
そう言って１５００エルクを代表してアゾルに渡した。
「はい、お疲れ様。次も頑張ってね」
「ありがとうございましたー」
報酬を受け取ったティオたちは疲れているけれど、満足した表情で建物を出て行った。

いやー、今日は疲れたッすね」
「そうだね、まさかゴブリンと戦う羽目になるなんて……」
冒険者ギルドを出た２人はそのまま宿に戻らず、道具屋をぶらついていた。
道具屋には今日の危機を救ってくれた閃光手榴弾の他に複数の調合された薬、モンスターに飲ませる毒などが売っていた。
興味に引かれるまま、ティオは使い道がわからない道具を手に取る。
「でも、倒せたからいいじゃん。これでモンスター討伐ができるっすよ！」
「あれ、アゾルって星１つのモンスター倒したことないの？」
「実はないんす。今まで採取クエしかやったことないんすよ」
そう言って恥ずかしさをごまかすように笑って頭を掻く。

「そうだったんだ、ほとんど僕と同じだったんだね」
「しょ、しょうがないっす！　俺だって冒険者始めてまだ一週間ぐらいだもん！」
アゾルの様子がおかしくて笑ってしまったが、一週間ぐらいしか経っていないならしょうがないかもとティオは勝手に納得する。
それよりも初めてのクエストで仲間と協力して――星１つとはいえ――モンスターを倒すことができたのだ。
それが嬉しくてまた１人クスリと笑ってしまう。
自分のことを笑っていると勘違いしたアゾルは目つきを悪くしてティオを睨み付ける。
その視線に気が付いたティオはすぐに謝る。
「ご、ごめん。えーっと、思い出し笑いしてた」
「なんすか、それ？　まぁ、いいか……」
アゾルはどこか納得できなかったが、しつこく聞くのも悪いと思ってしぶしぶ引き下がる。
店の奥にかけられた時計をみて、晩飯の時間にまだ時間があることを確かめる。
そして、いい加減に荷物を置いていきたいので宿に戻ろうと思った。
「ティオ、俺先に宿に戻って荷物おいてくるッす。あとで飯食いに行かないすか？」
「あ、いいよ」
「ティオもギルドの宿にいるっしょ。　なら６時ぐらいに１階で合流しない？」
「わかった。それじゃ、またあとでねー」
「うぃーっす」
アゾルは１度大きく背伸びをしてからギルドの宿があるほうへ歩いて行った。

ティオは１人になると改めて今日の出来事を思い出すと、嬉しさのあまり一人でクスリと笑ってしまった

クエスト終了（後書き）

とりあえず初めてのクエスト終了。
やったね、ティオ！　受けられるクエストが増えたよ！

冒険者の疑問（前書き）

今回は主人公たちと違う冒険者の話です。

冒険者の疑問

暗い林の中に輝く3つの怪しい光。
体全体が黒のために夜の林に溶け込んでいるけれど、装飾された骨の装飾と赤い目だけがわずかに存在を主張している。
茂みにしゃがんでいるアイアンドール3体は虫が体によじ登っても身動き一つしない。
ただ、林の沿って伸びている道を見張っているらしく、道に沿って頭を左右に動かしている。
武器は2体が剣と盾で武装し、マスケット銃を持った1体は森のほうに頭を向けている。

東から馬車が走ってくる。
それにいち早く気が付いた1体が味方の鎧を叩いて指をさす。
月の光も覚束ない夜に馬車を走らせる危険を冒す大事があるのか、しきりに馬に鞭を当てて走らしている。
商人の隣に座る人族の護衛――姿から冒険者か――は弓矢を膝に置いて林を見ていた。
アイアンドールは護衛が攻撃的な動きをした瞬間に撃てるように銃口で追いかける。
が、冒険者は隠れている魔物に気が付かず、商人の馬車はアイアンドールたちの前を通り過ぎて行った。
馬車が通り過ぎて行った後もしばらく構えていたアイアンドールは、自分たちの脅威にならないと判断してマスケット銃を下す。

木々の隙間を塗って飛翔した光の矢が警戒を解いたアイアンドールの頭を貫く。
矢は刺さった瞬間に爆発、アイアンドールの頭を粉砕した。
頭部を亡くしたアイアンドールは地面に倒れてスゥッと水に溶ける

ように消えた。
「いくぞ！」
冒険者のアルシムが身にまとっていた茂みを払って駆け出す。
その後ろを同じように茂みでカモフラージュしていたレイノとガブリオが続く。
思わぬ奇襲に味方が倒されたけれど、2体のアイアンドールは慌てず、盾を前にして冒険者たちを迎え撃つ。
1体はリーダーと予想してアルシムに斬りかかる。
1人と1体は剣がぶつかると離れて、またすぐに剣と剣をぶつけ合う。
体格では劣るアルシムは剣と盾で相手の剣を受け止め、軌道をずらして防御に徹する。

レイノが高く飛んで両手に持った短剣を同時に突き出す。
アイアンドールは盾を翳して防御、そのまま突き出してレイノの華奢な体を弾き飛ばす。
レイノは地面に叩きつけられたがネコ科の動物を思わせる動きで跳ね起きると、大きく横に飛んで振り下ろされた剣を避けた。
そしてアルシムと戦っていたアイアンドールの足を蹴りつける。
アイアンドールの体がバランスを崩してたたらを踏む。
タイミングを合わせるように踏み込んだアルシムの剣がアイアンドールの首を狙う。
が、その一撃すらも盾で塞がれてしまい、反撃に薙ぎ払った剣がアルシムの胸当てに傷をつけた。
レイノがうしろから短剣を指そうとしたが、盾を持った腕がバックハンドの要領で太い腕がふり払われたので慌てて下がった。

レイノに斬りかかろうとした1体は遅れて駆けつけたガブリオが引き受ける。
ドワーフの彼がアイアンドールと対峙すると、その身長さは2倍近

くある。
けれど、力ならアイアンドールに負けていない。
打ち下ろされる一撃一撃を弾き返し、隙を見て叩き込む斧が鎧に亀裂を造る。
またガブリオの斧が足に打ちつけられ、アイアインドールの体が地面に沈む。
チャンスと感じたガブリオはその首を切断してやろうと斧を大きく振りかぶった。
が、アイアンドールはしゃがんだ姿勢から体を旋回させて、不用意に近づいたガブリオの脇腹に爪先を強打させる。
「ぐふっ！」
地面に転がったガブリオは苦しげに腹を押さえる。
骨がいったのか、蹲って呻くばかりで起き上がれない。
「ガブリオ！」
レイノがポーチからアイテムを取り出して起き上がるアイアンドールに投げつける。
爆竹はアイアンドールの顔の前で炸裂し、派手に火花と音を撒き散らして動きを止める。
「ルア」
その隙に魔法を唱えて蹴られた場所を治療する。
ほのかに光る手で脇腹に触れているだけで痛みが引いていき、わずか数秒でガブリオは立ち上がることができた。
「すまん、助かったわい」
「どういたしまして、ほら、来るわよ！」
まだ破裂する爆竹を無視して大きく踏み込んだアイアンドールが剣を突き出す。
レイノを押しのけるように前に出たガブリオが斧で受け止める。
剣と斧がぶつかって拮抗する。
ガブリオは腹が大きく膨らむほど息を吸い込むと、林中に響くほどの裂帛の気合いを入れる。

「ブルゥアァ――！」
筋肉が一気に膨れ上がって受け止めていた剣を勢いよく弾き返す。
そしてがら空きになった胴体に斧を叩き込んで鋼の鎧を破壊してしまう。
破壊箇所から黒い煙が吹き出し、巨体が大きくよろめく。
「アルシム！」
「任せろ！」
レイノが入れ替わってアルシムが相手をしていたアイアンドールを引き受ける。
「ライトニング・アロー！」
光り輝く矢が生まれて、アイアンドールの頭めがけて高速で発射する。
アイアインドールは避けることができず、狙い通りに兜に護られていた赤い石を貫いた。
光りの矢は爆発して兜もろとも石を粉砕、アイアンドールの体が砕けて消える。

回避に徹していたレイノは敵を1体撃破したことを視界の隅で確認して攻撃に転じた。
下から切り上げた剣を避けて体を旋回、遠心力を付けた一撃を腹に見舞う。
分厚い装甲に阻まれてダメージは与えられないが、アイアンドールの動きが一瞬止まる。
レイノは両手に持つ短剣をアイアンドールの剣を持つ腕に刺して一気に捻り上げる。
鎧の隙間に刺さった短剣が滑るように動いて、その腕を切り落とした。
「むぅん！」
さらにガブリオの斧が膝裏を破壊して、アイアンドールを跪かせる。
「これで御終いだ！」

アルシムの剣が一閃し、アイアンドールの首を撥ねた。
こうしてアルシムたちは3体のアイアンドール討伐のクエストは成功した。

クエスト成功の証拠品となる赤い石を回収して、離れた場所に止めた馬のもとへ向かう。
「それにしても今回のクエストはおかしかったわね」
エルフ族であるレイノは先頭に立って目を光らせながら、今回受けたクエストを振り返る。
クエスト依頼者は街でも有名な店の主人。
商品を運ぶ商隊が林の中で道を見張っているアイアンドールを発見した。
その時は襲われずに逃げることができたが、その道は商品を運ぶのに利用している道。
安全を確認するために魔物を排除してくれというものだった。
「あの魔物たちはなんで道を見張ってたのかしら？　明らかに誰かを待ってる様子だったわ」
「そうだな。商人の馬車が通っても攻撃を仕掛けなかった。特定の人物を見つけるように命令されていたのか？」
アルシムも疑問を感じて考える。
正直、商人が襲われたときはどうしようかと焦っていた。
せっかくカモフラージュしてアイアンドールに近づいていたのが失敗するかと3人は思った。
けれど、アイアンドールは商人を無視した。
なにを考えているのか知らないが、明らかに目的を持っていたとしか思えない。
「とりあえずギルドには報告しておこう。俺たちが考えたところでなにもわからない」
「奴らが何を考えてるかわかるわけないだろ。さっさと帰って酒を飲もう！」

ガブリオが豪快に笑って難しい顔をしているアルシムの腹を斧の柄で乱暴につつく。
「もう、あなたは大人しくしなきゃ駄目よ。街に戻ったらちゃんと蹴られた場所をケアしなきゃ！」
「そんなの酒飲んで寝れば大丈夫だ」
ガブリオは面倒臭げに手を振るけれど、レイノは眼を鋭くしてガブリオの顔に指を突きつける。
「駄目よ、脇腹の治療をするからお酒は禁止！」
「そ、そんな……！？」
レイノの発言にガブリオが信じられないと言いたげに限界まで目を開く。
その様がおかしくてアルシムはフッと笑ってしまう。

レイノとガブリオが酒を飲む飲まないかで言い争っていると、考える気が失せてしまった。
とりあえずは駄々をこねるガブリオを宥めてやることにした。

冒険者の疑問（後書き）

クエストの受け方・達成の仕方。

受けたいクエストが書かれた紙を受付に持っていき、サインすればそれでＯＫ．
ただし討伐クエストだった場合、受ける冒険者が討伐対象と同じ星の数のモンスターを過去に倒していなければならない。

クエストを達成するには
採取系では目標の物を、討伐では討伐対象の部位を渡す。
運搬・護衛だった場合、ギルドから書類が渡されているので、対象者からサインをもらうこと。

クエストに関係なくてもモンスターの部位を渡せば道具屋やギルドで買い取ってくれる。
例　アイアンドールの赤い石　モンスターの毛皮や牙など。

護衛クエスト（前書き）

主人公がまたクエストを受けることになりました。

護衛クエスト

「なぁ、ティオ。ちょっとこのクエスト手伝ってくれないか？」
今日は何をやろうか悩んでいるところにハーメルに声をかけられた。
アゾルに紹介された仲間の一人で1度、採取系のクエストをやったことがある。
「別にいいけど、どんなクエストなの？」
「簡単な護衛クエストだな」
そう言ってクエストの紙をティオに見せる。

薬の配達者をネネト村まで送ること。
依頼者はこの街の商人で体調を崩した母に薬を届けたいそうだ。
街から村までは危険なモンスターや強盗の被害は報告されていないが、貴重な薬を確実に届けてほしいため冒険者は2、3人で受けてほしいとのこと。
町と村までは用意した馬車で移動するけれど、距離が離れているために1日は野宿する。
報酬は3000エルク。さらに食事は依頼者が出してくれるそうだ。
クエスト内容を読み終えたティオは頷いた。
「うん、これなら大丈夫そうだ。やるよ」
「よし、じゃあ受け付けに行こう」

ハーメルは受け付けにいた男性スタッフにクエストの紙を渡す。
「クエストは2人で受けるのかい？」
「ええ、俺とティオでやります」
ティオとハーメルが契約書にサインしている間に地図を見ていたスタッフは眉をひそめた。
「ちょっと待っててくれるか？」
「はい？」

なにか気になることがあったのか、スタッフは引き出しから冒険者が達成したクエストの書類を探し始めた。
大量にある書類から2週間前ぐらいに達成したクエストの束と4日前に達成した書類を取り出し、さらにその中から目当てのものを探す。
素早く紙をめくっていくと、すぐに探していた物が見つかった。
「二人とも、ちょっといいか？」
スタッフはティオたちの前に地図を広げる。
「クエストには危険なモンスターの報告はないって書いてあるけど、実はそうではないんだ」
「え？」
「実は2週間で2回、アイアンドールの討伐がこの付近で2回行われてるんだ」
「アイアンドールが！」
驚いた二人が同時に声を上げる。
頷いたスタッフは地図にある道に沿った位置にある林と、道から離れた草原の2か所に×印をつける。
「討伐した冒険者の報告が奇妙だったから覚えてたんだ。奴らはチーム組んでなにかを探してたみたいだ」
「チームを組んで……」
スタッフの言葉にハーメルは不安そうに俯いて呟く。
ティオも初めて戦った時の記憶が新しく、信じられないと長い溜息を吐いて両手で顔を隠した。
スタッフは一気にテンションを落とした二人を慌てて元気づける。
「だ、大丈夫だよ。どっちもベテランの冒険者が討伐してくれてるし、こっちが攻撃しなければ向こうも無視してくれるって！」
「本当に？」
「本当だよ。だからアイアンドールを見つけても戦おうとしちゃダメだ。とりあえず逃げてここに報告するんだ」
それで安心できるわけないけれど、1度負けた相手にいつまでもび

びっていたら冒険者は務まらない。
ティオはもう一度息を吐いて、自分の頬をぺしぺしと叩いた。
「よし、アイアンドールがなんだ！　あ、あんな奴倒してやる！」
「ティオ、言葉が詰まったらかっこ悪いよ」
「う……」
せっかく自分を励まそうとしたのに、ハーメルに静かに突っ込まれてしまい恥ずかしそうに俯いた。
「あー、とりあえずクエストは受けるんだね」
「は、はい。受けます」
「よし、それじゃあ依頼者に連絡するからそうだな……。３０分後にまたここに来てくれ」
「わかりました」
契約書を受け取ったスタッフは依頼者に護衛ができたことを伝える。受け付けのうしろに置いてある人の頭ほどもある水晶に触れて、微力の魔力を流す。
すると水晶は仄かに青く光を帯び始めた。

同じ頃、主に言いつけられて馬車のそばでバックに入れていた、拳より小さめの水晶が強く青色に光り出した。
それに気が付いた従者は読んでいた本をしまう。
「おい、ブド。護衛が見つかったみたいだから仕事に行ってくると旦那様に伝えといてくれ」
「わかった」
仲間に伝言を頼むと従者は素早く馬車に乗り込んで冒険者ギルドに向かう。

この水晶は魔力を通すことでセットになっている小型の水晶に光りを伝えることができるアイテムだ。
魔力の流し方によって色を変えることができ、今回は青に光れば護衛が見つかった。赤に光れば日を改めてくれという意味になってい

た。
これは軍隊でも狼煙として利用されており、雨の火でも影響が出ないため重宝されている。
護衛対象が来るのを待っている間、ティオとハーメルは簡単な打ち合わせをしていた。
「それじゃあ、前衛はティオだけだけど、大丈夫？」
「うん、ちゃんと守るよ」
エルフ族のハーメルは弓矢を使う冒険者。
長身ですらりとしたエルフ特有の体系をしている彼はティオよりも体格に優れているけれど、なぜか接近した戦闘が苦手である。
が、弓矢だけでなくアイテムや回復系魔法を使ったサポートは得意なため、仲間たちから頼りにされている。
「うん、サポートはちゃんとするからお願いね」
「りょうかい」
他に二人が持っていくアイテムも確認していく。
ティオは前衛を1人で務めるためにアイテムは少なくした。
傷薬と砥石、閃光弾や爆竹、小型のナイフなど。
ハーメルは弓矢と予備の弦、複数の解毒剤と閃光手榴弾や爆竹の他に爆発するとモンスターが嫌がる臭いが混ざった発煙手榴弾も用意した。
発煙手榴弾を初めて見たティオは手榴弾の中から薬を少しだけ撮んでまじまじと眺める。
そして試しに嗅いでみたら、鼻腔内に一杯の香辛料を詰め込んだ痛みが走り、蒸せて椅子から転がり落ちる。
まさか発煙手榴弾の中身を嗅ぐとは思わなかったハーメルは呆れて肩をすくめる。
「なにやってるの？」
尋ねてみるけれどティオは何回も咳き込むばかり。
しょうがないので悶えているのを押さえて、むりやり水筒を飲ます。

水筒の半分を飲み干してティオもやっと落ち着いたけれど、顔は真っ赤で目は涙目になっていた。
「ど、どんな臭いかなーって思ったんだけど……酷い臭い……」
「当たり前だよ。モンスターを追い払うためのものなんだから……」
ハーメルの憐れむような視線に傷ついて落ち込んでいると、スタッフが護衛対象である従者を連れてやってきた。

「待たせたな、彼が護衛対象であるエルサスさんだ」
スタッフが３０代の男を紹介する。
エルサスと紹介された男は笑って手を差し出す。
「薬を守るのがあんたらの仕事だが、一応でいいから私も護ってくれよ」
「ティオです。よろしくお願いします」
「ハーメルです。あなたもちゃんと守りますよ」
ティオたちも自己紹介して指し出された手を握る。
「よし、それじゃあ行こう。馬車は表に止めてあるんだ」
そう言ってさっそく2人を馬車に案内する。

こうしてティオは護衛クエストは始まった。

護衛クエスト（後書き）

種族紹介

人族
人間のことです。
能力は平均的で突出した能力はないけれど、訓練と経験を積めばいろんな戦い方に対応できる。
魔法も攻撃魔法、回復魔法両方を使える。

エルフ
長身長躯で整った顔立ちをした耳の長い種族。
人間よりも身体能力が高く、生まれながらの弓の名手である。
が、魔法は回復魔法しか使えず、火薬を使った銃を嫌う者が多い。

ドワーフ
背丈が低く筋肉質な体躯で、素早く動くことは苦手だけど力はとても強い。
男性は髭を生やすことが伝統で、逞しい髭は彼らの誇りである。
魔法は使えないけれど、独自の技術で開発した銃の破壊力は圧倒的だ。

魔族
耳が尖り、金色に輝く目をもつ種族。
人間のように地域によって肌の色が違ったり、額に角や第３の目がある。
身体能力に優れ、魔法耐久力に優れている。
回復魔法はできないけれど、豊富な攻撃魔法を駆使する。

こういう設定ってまとめておいたほうがいいのかな？

のどかな行軍（前書き）

何事も起きません。ちょっとグダグダしてますので、ご了承ください。

のどかな行軍

視界が開けた草原を馬車が進む。
危険なモンスターが見当たらず、ただ何事もなく馬車に揺られる。
ティオも最初は張り切って外を眺めていたけれど、何時間も集中できるわけがない。
今は眠りそうになるのを耐えてしきりに目をこすっている。
「もうすぐ休憩するから、もう少しだけ頑張ってくれよ」
「了解です……」
返事をしながらも欠伸をして、景色が変わらない外を眺める。
エルサスの隣に座るハーメルは静かにしていて、時折地図を眺めては危険なポイントがないか確認している。
誰も喋らないまま、のどかな雰囲気が続く。
エルサスも無理に冒険者と喋ろうとせず、故郷でよく利いた歌を口ずさんでいる。

「お、なんだ？」
地面を強く蹴る蹄の音に振り返ってみれば、２人の男が馬に鞭当てて駆けてくるのが見えた。
彼らはスピードを緩めると、馬車を引くロバの速さに合わせて近づいてきた。
馬に乗る２人は皮鎧を着こみ、腰にはハンデットソードを帯びている。
２人のうち灰色の髪を後ろに撫でつけ、顎髭を短く整えた男がエルサスに尋ねる。
「失礼、人を訪ねたいのだが、よろしいか？」
「はい、なんでしょうか？」
二人が乗っている馬は手入れがされて、尻に軍用の印がいれられている。

そして冒険者らしい格好をしているけれど、皮鎧は傷が１つもない新しいもので質も上等なものを使用している。
剣は鞘に収まっているからわからないけれど、きっと名工が創ったものだろう。
すぐに彼らが身分のある者と見抜いたエルサスは態度を低くして接する。
「うむ、２０代後半の男で金色の紙を肩まで伸ばしていて、額当てをつけて我々と同じ格好をしている。
街を出てから誰ともすれ違っていないため、エルサスは申し訳なさそうにくびを横に振る。
「申し訳ございませんが、街に出てから人とすれ違っておりません」
「そうか……。わかった、邪魔をしたな」
「いえ、ご協力できずにすいませんね」
男は相方に声をかけると、また馬に鞭を当てて駆けて行った。

去っていく二人組を見送るエルサスは考えるように顎をさする。
「こりゃ、どっかの坊ちゃんが逃げ出したな」
「逃げ出した、ですか？」
「そうだ。よくあるんだよ」
あの二人と同じ経験をしたエルサスは苦笑いを漏らす。
「屋敷じゃ作法や算術、この国の歴史についての勉強をしたり、旦那様の手伝いだってしなきゃいけない。
そりゃ、外に出て息抜きもしたくなよな」
「なんか、やりたいことができなくてつまらなそうだね」
堅苦しいばかりの生活に同情してティオは悲しげに呟く。
「しょうがないな。いい生活をするためにはそれなりの犠牲が強いられるんだ」
「商売するって大変だね」
「おい、俺たちだって同情する余裕はないさ」
ハーメルが他人事のように言うティオに指摘する。

「俺たちだって自分の生活が一杯一杯だぞ。命がけのクエストか、安いクエストたくさんこなさないとすぐに金がなくなるんだからな」
「あ、そっか……」

ティオは自分たちの生活を振り返って項垂れる。
まだ冒険者になってから日は浅いけれど、それでも冒険者の辛さはわかってきた。
食事は宿で安くてボリュームのあるハンバーガーが食べられるけれど、食物繊維は草原で拾った薬草で取るしかない。
武器の研ぎもちゃんとした武具屋に頼まないといけないし、道具だってすぐに切れるから買わないといけない。
アルバージの店では欲しい道具は見つけたけれど、採取クエストばかりやっている彼に買えるわけがない。
「冒険者も楽じゃないよね……」
「お前、顔がころころ変わるな」
やれやれと肩をすくめたハーメルは振り返ってティオの頭をワシャワシャと撫でる。
「今は苦しいけど、頑張ればすぐにまともな金が入る。だからそんな顔するんじゃないよ」
「な、なんか子供扱いされてない？」
「してるんだよ」
その言葉にエルサスは吹き出してしまった。
「まるで兄弟だな。まぁ、彼の言うとおり、だれだって頑張らなきゃいけないってことった」
なんだか二人に子供扱いされていることに納得できず、ティオはすねてそっぽを向いてしまった。

のどかな行軍（後書き）

戦闘がないとうまく文章が進まない……。
私ってホント、バカ……。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3541z/

ティオの冒険記

2012年1月12日00時50分発行